



目次

修士論文要旨

「中世集団墓の被葬者像についての研究」

小林高太

卒業論文要旨

「古墳時代の石川県における副葬品玉類の研究」

赤座裕子

「古墳転換期前夜の北陸における地域間交流に関する一考察 ― 供献土器を中心として―」

小川絵理香

「遺跡分布から見る富山県一歴史時代以前の地域性に関する一考察―」

北村志織

「埋甕についての一考察 ― 長野県の事例を中心として―」

小松彩乃

「中世荘園における集落群の様相 ― 越中徳大寺領宮河荘推定地 熊野遺跡群において―」

下嶋明日香

「北陸における古墳研究の一考察 ― 福井県と石川県を事例にして―」

竹中庸介

「北陸における刀剣形石製品の研究 ― 分類からの考察―」

栃堀哲彦

「加賀国府移転問題についての考古学的研究―立国当初における国府の加賀郡所在の可能性について―」

松岡治奈

「富山県におけるカマド出現・普及の背景」

皆川恒子

「古代製鉄コンビナート、軽井川南遺跡群についての一考察」

山崎翔

「古墳時代の刺突漁具副葬の時期的変遷の検討」

吉田有里

修論・卒論発表会と追いコンのお知らせ

編集後記

修士論文要旨

中世集団墓の被葬者像についての研究

小林高太

中世には数十基以上の墓が集まってできた集団墓が営まれることがある。集団墓は土を盛った墳丘墓や石を集めた集石墓、五輪塔などの石塔墓といった様々な形態の墓が集まって墓地を構成しており、中世初め頃に描かれた絵巻物『餓鬼草紙』で見られる墓場の光景が現在でも見られるのである。中世の墓地の状況を表していると言える集団墓であるが、このような大規模な墓地に誰が葬られているのかは明らかではない。そこで本研究では、富山県内の集団墓である上市町黒川上山墓跡に焦点をあてて、集団墓の被葬者像について考察を行った。

黒川上山墓跡は 68 基もの墓で構成される墓跡である。ほとんどの墓が中世前期に造られており、これまで被葬者として僧侶や在地の領主層が想定されているがはっきりとはしていない。今回は本墓跡の構造と形成について分析を行い、被葬者像に迫ることにした。その結果、本墓群は数基の墓がまとまってできた小群に分けられることが確認でき、群ごとに葬法や墳丘形態などの特徴に違いが見られた。また、墓群の形成を見ていくと墓の成立期に各群の中心となる墓が築かれ、その後、その墓の周辺に造りつけられるように群を成し墓地が形成されていく。これらのことから各群は一族墓、家族墓であると思われ、本墓跡は 3・4 の一族・家族の墓が集まってできた墓地であると想定される。また、群ごとに違いが見られたことから一族ごとに造墓に対する考え方(造墓規範)に違いがあるように思われる。僧侶の墓というよりは在地領主など有力層の一族墓であると想定した。

さらに詳しく見ていくために富山県全体の中世墓に目を向けた。立地に注目したところ山と平地という 2 つの立地に分けられ、それぞれに異なる造墓規範があると捉えた。山に立地する墓には山岳信仰の影響が見られ、平地に立地する墓はそれとは異なる影響を受け造墓されると思われる。このような傾向は中世前期により顕著であり、山岳信仰の最盛期と重なる。中世後期には浄土真宗などの新仏教の浸透や武士の台頭などの影響により山岳信仰は衰退し、中世墓も新しい形態の墓が造られるようになるなど造墓行為が多様化する。また、より下の階層の人々にも造墓行為が広がる傾向も見せる。

黒川上山墓跡にはその立地から山岳信仰の影響が強く受けているということは以前から言われてきた。今回群ごとに特徴を見ていったところやはりその影響が強いように思われる。しかし、群によっては平地の墓の特徴を持つものも見られた。これは本墓地が様々な思想や信仰を持つ一族が集まり築かれたためと考えられる。中世には一族が死後も集うことにより、一族が繁栄するという考えがあったことから、一族の永続的な繁栄を願った領主層などによって集団墓が築かれたのであろう。

最後に、本稿の作成に当たり、黒崎先生、高橋先生には多くご指導ご助言をいただきました。また 5 年もの長い間にわたりお世話になった富山大学考古学研究室にこの場を借りて深く御礼を申し上げます。

卒業論文要旨

古墳時代の石川県における副葬品玉類の研究

赤座裕子

古墳時代の墳墓から出土する玉類は、被葬者の性格や階層を解き明かす手がかりや、しばしば出土遺構の年代を推し量る指標として位置づけられてきた。また、近年では玉の生産地や製作技法とあわせて流通の研究も進んでいる。しかし副葬品研究の中では、玉類は副次的な存在として扱われることが多いように思う。また、畿内周辺の事例に関する考察は多く見られるが、地方の古墳への言及は首長墳に限られ、地方における玉の文化はあまり多くが解明されていない。以上の背景を踏まえて、小論では石川県の古墳・横穴墓から出土した玉類を集計し、出土様相の地域的・時期的変化や、他の副葬品や墳形・規模との関係を分析することによって玉の文化の解明を試みた。

取り扱う遺跡は、集成編年1期以降に築造された古墳および横穴墓のうち、玉類および耳環と豎櫛が出土した遺跡である。遺跡数は136遺跡、遺構数では138遺構である。なお、時代区分は前方後円墳集成編年を用い、前期を1～4期、中期を5～8期、後期を9～10期とした。

前期では加賀・能登共に大首長墓から出土し、威信材としての性格が濃厚であった。しかし中期以降では、加賀と能登で出土量や器種に差異が認められた。

加賀では玉類出土のピークが中期にあり、この時期の玉類には滑石製白玉の大量埋納がしばしば認められ、甲冑や豎櫛といった、機内食の強い副葬品と同じ分布を示すことから、中期の加賀における玉類は畿内との結びつきが強い集団がより多くの玉類を入手できたものと解釈した。中でもヒスイ製勾玉は、甲冑の副葬が開始された下開発茶臼山9号墳をはじめとして、同古墳群に集中することから、畿内から直接下賜された可能性があると考えられる。小論ではこれを前期の大首長自身の権威を示す威信材と区別し、畿内政権への恭順を示す性格を持つ威信材とした。

後期になると、能登の玉類副葬がピークに達する。中期の加賀のように畿内との関連が疑われる地域に玉が集中する一方で、横穴墓や小円墳のような家長墓からも豊富な玉類が見られる。また、中期の加賀のように、分布に極端な集中がなく、能登全域に渡って点々と分布している。この現象は、耳環の普及と軌を一にしていると考えた。耳環は、威信材というよりは個人が普段から身に付けた服飾目的の性格が強いとされているので、玉類もこれと同様の役割が付与されていたのではないだろうか。つまり、後期には、玉類は威信材だけでなく、奢侈品としても用いられたと考えた。

以上、本論では副葬品玉類に3つの役割をみいだした。一つめは、大首長の権威を示す物としての威信材、二つめは畿内政権との結びつきを示すための威信材、そして三つ目は「おしゃれ」を目的とした奢侈品である。

今回は石川県という狭い範囲しか扱うことが出来ず、論拠がやや説得力に欠ける物とな

ってしまった。また、調査の進展によって分布が変われば、小論での解釈と矛盾が生じる可能性もあり、今後の課題としたい。

末筆ながら、温かいご指導を頂いた黒崎直先生、高橋浩二先生、先輩の皆さまに厚く御礼申し上げます。

古墳転換期前夜の北陸における地域間交流に関する一考察

－供献土器を中心として－

小川絵理香

はじめに、本論では北陸地方の土器を墓に供献する儀礼、土器供献に注目し、弥生時代中期から古墳時代前期前半までの期間を対象とし、そのあり方から 3 県間の交流関係を見ていくことを研究目的とする。

まず、3 県（福井・石川・富山）の土器が供献される墓の変遷を追い、交流関係を見た上で、出土位置別に分類した供献土器の組成を考察して時期別の特徴をあげ、共通の点や相違点を見ることから関係性を見出す。すると、墓の変遷では、台状墓や四隅突出型墳丘墓の導入から福井→富山→石川という流れが見える。土器組成では、弥生時代中期の時点では石川と福井は同時期に土器供献儀礼を取り入れたが、その後の展開は少し違う様子を見せ、弥生時代後期になると遅れて富山でも土器供献儀礼が行なわれ、その形態は福井のものに似ており、福井と富山の深い関係が見て取れた。そして終末期になると石川県も他の 2 県と同様の土器供献を行うようになり、古墳時代になると立地の違いでほとんど同じ様相を示す。このように土器組成でも大体福井→富山→石川の流れが見て取れ、その中でも石川は他の祭祀などでも他の 2 県とは違う様相を示す。このことから、「石川県は全く違う祭祀を行っていたから、導入は同時期なのに四隅突出型墳丘墓や台状墓の導入に遅れをとった」という仮説を立てた。しかし、隣接する石川県を飛ばして福井→富山という波及は海のルートしか考えられないので少し疑問を感じる。

そこで、出土位置が明確な供献土器の組成を対象とし、各祭祀形態の時期別の特徴をあげ、地域間交流を見ることから仮説が成り立つかを検討することとする。分析を行なうと、福井や富山に石川の影響が及んでいたということが見て取れ、地域間交流の存在が明らかとなった。また土器の加工方法（穿孔・打ち欠き・赤彩・すすの付着）でも、石川と福井には煤付着の鉢や壺が出土することから火を使った祭祀を行っていたということが明らかとなり、各地域間の交流がしっかり見え、先ほどの仮説が成り立たないことが分かる。

以上のことから、石川県の墓制の導入の遅れは、別の祭祀を行っていたからとは一概に言えないことが判明した。また、祭祀土器は横の繋がりが見えるのに、墓制ではあまり見えないという分析結果から「石川県では、祭祀形態は受容できても、墓の形態という大規模な変革を起こすことは容易ではなく、徐々に変革を行なっていったため、他の 2 県に遅れをとってしまった」と考えられ、北陸 3 県は、墓などの大きな目線で見ると繋がりが薄く感じられるが、供献土器の組成や祭祀加工などの細かい面では、しっかり横のつながりを持ち続けたまま山陰や近畿や東海の影響を受けて独自の文化を築きながら古墳時代に向かっていったという結論に至った。

本論文の作成にあたっては、黒崎・高橋両先生をはじめ、多くの方々にご指導・ご協力を頂き、誠に有難うございました。記してお礼申し上げます。

埋甕についての一考察～長野県の事例を中心として～

小松彩乃

埋甕とは、広義には地面に穴を掘り土器を埋設したもので、縄文時代の風習の一つである。その用途は、幼児の甕棺や胎盤収納施設など様々な説が提唱されているが未だに詳しいことはわかっていないのが現状である。今回分析の対象とする長野県は全国的にも埋甕が多い地域であることから古くより多くの研究がなされてきた。しかし県内の研究の対象地域は数が出ている中・南信地方を中心としたものだが、発掘調査の進展で北信地方をあまり埋甕の研究がされてこなかった長野県北信地方のデータを中心に長野県全体の埋甕の様子を見てみる。そしてそこから埋甕の伝播の様子や、さらには人々の交流の様子を明らかにすることを研究の目的とする。

研究の方法：遺跡ごとに埋設のされ方、土器の欠損状態、土器の系統に注目しそこに時期という要素を加え、それぞれの様相を分析していく。また分析の対象とする遺跡は埋甕が5つ以上検出されている長野県内の縄文時代の14遺跡を使用することとした。

結果：まず正位か逆位かという埋設のされ方に埋設された時期というものを加えてみると、正位と逆位で差が出ることがわかった。次に土器の欠損部について。こちらは埋設方法のように顕著な結果を得ることはできなかったが、県の北と南若干の違いがみられる。最後に土器の系統を見ると、埋甕に使われる土器は一つの系統の土器に統一されることなく使用されている。また注目すべきは必ずしも使用されているのは在地の土器だけではなく流入もしくは伝播した土器が混じっているということである。これらのことから埋甕の背景には人々の移動があったのではないかと推測される。

考察：逆位の埋甕が文中期後葉Ⅱ期に突如として流行していることについて、一つの仮説として、何らかの理由により大規模な人の移動が起こり埋甕の風習を各地にもたらしたのではないかと考える。中期の後半は気候が寒冷化する時期でもあり、全国的にも土器の移動が激しい時期である。このことと結びつけて考えるのなら、逆位の埋甕の風習を持った人々がその土地での生活を維持していくことが困難となり、他の土地に移動し、その風習を伝えたのではないか。まだまだ論証としては甘いところもあるが、埋甕に使われた土器より人の交易などによる交流があったと想定されることは可能だと思われる。だが、そもそも本当に埋甕は土器の系統などは何も考慮されずに埋設されたのであろうか。埋甕とは一体何なのかという疑問について少し検証してみる。従来の用途論では幼児甕棺説と胎盤収納説が主に議論されてきたが、埋甕はそのほとんどが床面に少し口を出すまたは床面と同じ高さに埋設されていることを考えると、衛生的な問題もあり、実用性は低かったのではないかとと思われる。そこで注目するのは境界の指標であったという考え方である。埋甕の多くが住居の入り口部に埋設されていることと、屋代遺跡群の例のように屋外に埋設された土器の中には集落のはずれ、つまり境界と思われる場所に埋められているものが存在する。このことから境界に関わる祭祀をおこなっている

た可能性が高く、また在地以外の土器を使用している例が多いのは、他の集落からの婚入者を示すものではないかと考えられる。以上のように埋甕から当時の人々の生活の様子を推測するためにも重要な遺構であるといえよう。ただ、まだ解明されていない部分が多い遺構でもあるので今後の研究に期待したい。

考古学において、寄進された土地で構成された中世荘園のように遺構として明瞭な特徴が残らないものを証明することは難しい。しかし、中世荘園を考える上で外すことのできない荘園を構成する集落の在り方についての史料はあまりみられず、ここに考古学が中世荘園に関わる可能性があると思う。そこで本研究においては、集落（群）のあり方から荘園の様相を考え、また史料から分かる荘園の盛衰と集落群の様相の変化から関連性を考えることを目的とし、中世荘園推定地にある富山県富山市婦中町の中世集落遺跡群「熊野遺跡群」を取り上げた。

まず、遺跡群の遺跡である道場 I 遺跡（13C～15C）を建物遺構や地割の変遷、土器・陶磁器の組成から分析し、道場 I 遺跡の性格や土地利用の様相、盛衰を考えた。また、遺跡群を構成する遺跡ごとに建物遺構の規模の変遷や奢侈遺物の量をみて、遺跡群の中心地の変化や遺跡群の盛衰を考えた。

道場 I 遺跡の様相として、15C 後半を除いて土地利用にあまり変化がみられないのが特徴的である。大型建物がある場、その大型建物に従属するような建物群がある場、空閑地、といった場から成る遺跡の様相が、13C から 14C まであまり変化しないことが遺構や遺物組成からみられた。15C に入るとそれまでとは異なる建物群の構成・遺物組成がみられる。また、15C 後半は建物数の増加や区画溝の細分がみられて一見発展している様相をみせるが、土器・陶磁器の量が大幅に減る。15C 後半は本遺跡群が属していたと推定される荘園の衰退期である。道場 I 遺跡の性格の変化は荘園の衰退期とほぼ一致している。さらに、建物規模が一定であることもあり、特定の権力＝荘園の下で経営されていたと考えられる。性格としては、多種にわたる遺物や棧橋状遺構付近の空閑地、旧河川沿いに立地していることなどから荘園の物資集積地であったと考えられる。

遺跡群全体を見ると、13C から開発された遺跡が多い。その中でも規模の大きい建物が見られる場所（道場 I 遺跡・中名 I 遺跡・持田 I 遺跡）が開発の中心であったと考えられる。こういった中心地は、各遺跡の奢侈品の産地や量のあり方から開発しながら何度か変化していることが分かる。建物数や各遺跡の在り方に変化が大きく見られるのは 15C であり、本遺跡群の画期となる。上記の通り、15C 後半は荘園としての存続が危うくなり始める時期である。また、本荘園が開発され始めるのは 12C 末である。これらの史料から分かる荘園経営の諸時期と本遺跡群の開発開始時期・画期が一致するのには、やはり荘園とそこにある集落の間にはそれなりの関係があったことを示している。建物規模にあまり変化がみられないことから同様のことが考えられる。

研究を行なうに当たり、黒崎直先生、高橋浩二先生には丁寧なご指導、ならびに多くの助言をしていただいた。また、関係諸機関には貴重な資料を見せていただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

北陸における古墳研究の一考察
- 石川県と福井県を事例にして -

竹中庸介

古墳の規模や段築などの外部施設、埴輪や副葬品の内容から福井県と石川県、越前と加賀・能登の間には明確な違いが存在する。しかし、松岡・丸岡・金津の地域の古墳が突出していることもまた事実である。北陸というフィールドを考えると、越前・加賀・能登の3地域は陸続きである。これらの地域内で、古墳の持つ性質から地域差がどこに現れるのかを改めて考えるために本研究を行った。対象とする地域は越前から能登までの地域を19の小地域に細分した。また対象とする古墳は各地域における大小の主要な古墳とした。北陸では未発掘の古墳が多く均等な分析を行うため、どの古墳でも有している墳形と規模に着目し、古墳の築造密度と分布状況から19の小地域内の地域差を検討した。

前期では、越前で前方後円墳、加賀・能登で前方後方墳が築造の中心を占めるという傾向が示され、前方後円墳では松岡・丸岡の地域と鯖江盆地周辺の地域との間に密度の差が見られた。前方後方墳では江沼と羽咋の地域で他地域よりも築造数が少ない。中期においては、前方後円墳がさかんに築造される地域では円墳の密度が希薄な傾向を持ち、前方後円墳の数が少ない地域では円墳の数が多という傾向が見られた。前者に相当する地域は松岡・丸岡や金津、江沼、能美の4地域となる。鯖江盆地では古墳の築造数が減少するとともに越前平野周縁の丘陵に古墳が築造されている。後期では、古墳の密度が集中する地域としない地域に分かれる。集中する地域は金津、江沼、羽咋、七尾の4地域でとなった。

次にこれらの地域差が何に起因するか考察を行った。前期では、分析結果の通り前方後円墳と前方後方墳の違いによるものが明確である。中期では、松岡・丸岡、江沼、能美に大型古墳が見られその他の地域と相反していることから、突出した前方後円墳の築造が円墳の築造数の減少に繋がっていると考えられる。鯖江盆地の古墳数の減少と越前平野周縁部における大型古墳の増加は、ちょうど鯖江盆地に蓋をするような形を呈する。福井平野の入り口に要所のように副葬品の豊かな円墳や60m以上の大型古墳が築かれていることから、鯖江盆地と越前平野周縁部の地域差は勢力の中心が越前平野に置かれていたことによるものであると言えよう。後期において金津、江沼、羽咋、七尾の4地域に古墳の築造が集中することから、北陸における拠点として捉えることができる。これは初期須恵器窯の操業が開始される地域と共通していることが挙げられ、越中氷見の後期首長墓である朝日長山古墳と越中の初期須恵器窯である園カンデ窯との関係からも十分に考える事ができる。これらのことから地域差は、前期→中期→後期へ流れの中で、前方後円墳と前方後方墳の2極化から前方後円墳と円墳による相互補完化または相反化へ推移し、最終的に前方後円墳と円墳による拠点化へと変化していく。またその場所は松岡・丸岡と江沼の間という越前と加賀の境界から始まり、松岡から能美の間に拡がって、金津、江沼、羽咋、七尾といった加賀・能登の方に移動していく。今回の研究において墳丘と規模の分析のみで

副葬品などを用いるまでには至らなかったことが反省すべき点である。

最後に本論を作成するにあたって、ご指導いただいた黒崎直先生、高橋浩二先生、また、有益な助言をいただいた諸先輩方ならびに研究室の諸兄に厚く御礼申し上げます。

今回扱った刀剣形石製品は縄文時代後晩期に存在した石製品で、祭祀的性格を有する遺物と考えられている。刀剣形石製品という名称は後藤信祐 1986「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究」で使用された。このなかで小型石棒、石刀、石剣といった遺物がこの範疇に含まれている。これらは、小型石棒は、刃部をもたない、石刀は刃部を一側縁にもち、石剣は刃部を両側縁に持つというように刃部に着目して分類した。北陸の縄文時代の刀剣型石製品はこれまで単独での研究はほとんど行われていなかった。それらを分類し、地域差を明らかにしようというのがこの論文の目的である。

分析方法は、北陸地方に存在する刀剣型石製品を集成し、小型石棒、石刀、石剣ごとに分類し、分布を明らかにした。次に、これらを後藤氏の分類を基に型式分類を行い、分布を明らかにした。

その結果、石刀のうち、ⅡAa型としたものは新潟県には少ないものの、富山県、石川県には顕著な分布が確認できた。石剣に関しては、新潟県、石川県の南部でそれぞれ出土点数が多く、これらの地域から離れるにしたがって減少していくという結果が得られた。型式ごとの分布をみると、新潟県とそれ以外の北陸の県で相違がみられた。新潟県は後期の興野型、晩期の貝の花型、柏子所型など東北、関東地方に分布する刀剣形石製品が存在し、富山県に隣接する地域では他の北陸の地域と似た様相がみられた。新潟県以外の北陸地域では、後期は中部、近畿地方と共通する櫃原型がみられ、晩期は中部地方と共通する小谷型が存在していることが明らかとなった。

このように若干の地域差が確認できたので、その理由について考察を行った。刀剣形石製品のうち、石刀、石剣は全国的な分布をみると、石刀は分布の中心が東北地方に偏るものと、中部地方に偏るものがそれぞれ存在し、石剣は関東地方に主に分布している。型式についてみると、やはり、新潟県では東北、関東地方に中心をもつ型式が、北陸地方では中部地方に分布の中心をもつ型式がそれぞれ多く確認できた。このことから、北陸地方の地域差はそれぞれ隣接する地域の影響を受けたものと考えた。

また、同時期に存在した石製品について北陸における分布をみたところ、石冠、御物石器が北陸地域の刀剣形石製品のうちのⅡAa型石刀や小谷型と類似した分布をみせ、これらと性格に何らかの関連があるものと考えられる。反面、独鈷石については、新潟県に多いなどこれらとは違った分布をみせた。

北陸という比較的狭い範囲においても、刀剣形石製品には地域差が存在することが判明した。より北陸の様相を明らかにするためには岐阜県などの今回取り扱わなかった地域についても併せて考える必要があると思った。

加賀国府移転問題についての考古学的研究

－立国当初における国府の加賀郡所在の可能性について－

松岡治奈

加賀国は、823年に越前国から分れて立国した。加賀国は加賀郡・石川郡・能美郡・江沼郡の四郡から成り、文献史学の成果により国府は能美郡に置かれたとされている。しかし、近年、立国当初の国府所在地について文献史学や考古学による研究成果から、従来考えられてきた南加賀地域の小松市(旧能美郡)古府台地周辺ではなく、北加賀地域の金沢市内(旧加賀郡)に求める見解が出されている。これが、加賀国府移転問題である。

本研究では、まず近年の調査・研究成果を加えた研究史の整理を行い、北加賀・南加賀両地域における遺跡の様相の比較により、国府移転問題にアプローチした。

北加賀地域と南加賀地域において、9世紀前半から10世紀にかけての官衙・寺院・荘園・集落・窯業遺跡を対象に、半世紀ごとに両地域における遺跡の様相を捉え、比較・検討を行った。結果、立国当初は南加賀地域の能美郡古府台地周辺に顕著な遺跡はみられず、北加賀地域の大野湊周辺に港湾官衙が集中し、金沢平野部には荘園や寺院が分布する様相がみられた。当時の加賀国について、渤海交易の要所であることを示唆する文献や考古資料が指摘されており、大野湊周辺の港湾官衙や金沢平野部における寺院の外交的役割が中央に重要視されたと考えられる。また、立国の翌々年に加賀国は上国へ昇格したことが文献に記されており、北加賀地域の経済基盤が中央にとって重要視されたと考えられ、北加賀地域の金沢平野部に当初の国府が置かれた蓋然性が高いと考えられる。

10世紀になると、北加賀地域では、大野湊周辺や金沢平野部における遺跡が衰退傾向に転じ、森本地区や手取川扇状地において遺跡が集中する様相がみられる。当時は渤海交易が終了し、砂丘移動(平安海進)により海岸地形が大幅に変化したことから、湊を拠点とした加賀郡の地方行政の動揺が窺える。また、南加賀地域では、能美郡古府台地周辺において官衙や寺院、集落が形成され、古府台地に隣接する漆町遺跡では荘園経営の様相がみられることから、古府台地を拠点とした地方行政の整備・施行が窺える。加賀郡の拠点地域である大野湊・金沢平野部の遺跡が衰退し、能美郡における古府台地周辺の多くの遺跡が盛期を迎えるといった両地域の様相の変化から、10世紀には能美郡に国府が置かれたと考えられる。

能美郡古府台地に位置する十九堂山遺跡は、国府が能美郡に置かれた際の国分寺として最も有力な遺跡である。十九堂山遺跡と同種の瓦が、平安末期に成立した白山中宮八院の一つと伝えられる隆明寺から検出され、白山中宮八院の寺院群は古府台地に隣接して立地するため、十九堂山遺跡と白山信仰は関連性が強いと考えられる。また、9世紀中頃には全国的に飢饉が起こったことが文献に残されており、この飢饉の影響から、加賀国の民衆の間で白山信仰の志向が高まり、9世紀後半・10世紀頃には仏教による民衆の支配は能美郡において有利となり、古府台地周辺に国府が置かれたと考えられる。

富山県におけるカマド出現・普及の背景

皆川恒子

古墳時代中期以降、竪穴建物には炉にかわってカマドが出現・普及するようになる。カマド出現・普及に関しては、須恵器製作技術など新しい文化の一部として朝鮮半島から渡来し、須恵器生産の各地への普及とともに現れたとされている。本研究では、富山県においてなぜカマドが出現・普及したのか、その背景を明らかにすることを目的とする。また、その背景の一因として従来述べられてきた須恵器生産との関連についても検討した。

まず、富山県内で検出されている5世紀中葉～6世紀に属す竪穴建物を(39遺跡・280棟)を対象に、カマドが出現・普及する時期・地域について分析した。その結果、まず5世紀中葉に小矢部川流域でカマドが出現し、一端断絶する。そして6世紀後半に射水丘陵で再出現し、時期を下るごとに射水丘陵以外の地域でもカマドは普及、8世紀後半には富山県ほぼ全域で普及のピークをむかえる。中でも、カマドをもつ遺跡は射水丘陵とその周辺地域に集中してみられることがわかった。

次に、須恵器生産が実際にカマド出現・普及と関連するか考えるため、県内における5世紀中葉～8世紀の須恵器窯(53遺跡・105基)分布・操業時期について分析した。その結果、須恵器生産は氷見地域で6世紀前半に開始するが、その後須恵器窯は継続しない。再び7世紀初頭に射水丘陵に集中して操業され、7世紀前半以降は他地域でも小規模であるがその生産が始まる。8世紀から須恵器窯は徐々に増え、8世紀後半に須恵器生産はピークに達する。また8世紀以降、須恵器生産は射水丘陵周辺に集約していくことがわかった。

分析から、富山県のカマド出現・普及の背景について考察した。まず、5世紀中葉に小矢部川流域でカマドが出現・断絶するのは、この時期の須恵器窯がないため、須恵器生産とは違う要因が考えられる。その要因として、この時期に小矢部川流域で集落遺跡やその首長墓と考えられる古墳から初期須恵器が出土している点があげられる。小矢部川流域でカマドが導入されたのは須恵器という最新文化を受容できる背景があったからである。だが、この時期カマドを採用した集落は少数で炉が根強く採用されたため、広まらなかったと考える。6世紀後半以降のカマド出現・普及については、カマドをもつ集落は射水丘陵の場合、集落と須恵器窯が伴い、竪穴建物から須恵器が多量に出土しており、須恵器工人集落の可能性が高い。新技術をもつ人々がこの時期移住し、住居を作る際にカマドを採用したと考える。カマドは7世紀初頭まで射水丘陵周辺地域のみで、以降は他地域へ広がり、同様に須恵器窯の分布も7世紀前半に射水丘陵以外の地域で分布が見られる。須恵器窯の他地域への波及とともにカマドも射水丘陵以外の地域へ拡散したのだろう。8世紀以降、カマドは大規模に普及するが、それは射水丘陵における大規模な須恵器生産が関わっており、この大規模手工業生産開始により、工人集落以外の一般集落でもカマドが普遍的に採用されたと考える。このように6世紀以降のカマド出現・普及の背景には須恵器生産などの手工業生産の本格的な開始と深く関わっていることがわかった。

製鉄、考古学において「砂鉄または鉄鉱石から鉄を抽出する作業」を意味するこの行為は、日本では古墳時代中期～後期に開始されたと言われている。しかし、東日本では奈良時代以降に鉄の生産が始まるのが一般的で、研究対象とした軽井川南遺跡群のある新潟県も同様の時期に生産が開始されたと推定されており、現在までの研究で8世紀代～13世紀代まで製鉄遺跡が存在し、鉄作りが行われていたことがわかっている。製鉄遺跡が郡単位で見られることから、古代越後の鉄作りは郡内における鉄の供給のみを目的として行われていると考えられてきた。ところが、その事態が軽井川南遺跡群の発見によって一変する。約28haもの広大な面積から鉄生産に関わる遺跡が合計22ヶ所発見されたこの遺跡群は、およそ400年間もの間鉄作りが行われ、製鉄から鍛冶、鑄造まで、一連の作業の流れを一つの遺跡群内で迎えることが出来る希少な事例である。これほどまでの規模で行われていた鉄生産の目的が、郡内における鉄の供給のみであったとは考え難く、背後に国府、在地の富豪層といった政治力を疑わずにはいられない。この遺跡群の発見によって、古代越後における鉄生産が、必ずしも郡内における供給のみを目的としていたわけではないという可能性が生じてきたのである。

今回、軽井川南遺跡群を研究するにあたって、調査報告書が刊行されていない為、遺跡群全体を大まかに中央部分、東側部分、西側部分の三つに分け、各部分毎に資料を入手できた遺跡のみに絞って分析を行い、三部分の分析結果を合わせて、遺跡群全体の様相や変遷を明らかにするといった手法を取ることにした。分析結果の中で最も目を引くのは中央部分であり、そこに存在する下ヶ久保C遺跡では推定総量100tもの鉄が生産されていたと思われる。この量は8～12世紀までの400年間で、日本全体で生産された鉄のおよそ一割にも上る莫大な量である。この他にも中央部分に存在する下ヶ久保の名を冠する遺跡からは多数の製鉄炉、木炭窯に加え、鍛冶炉、溶解炉が検出されており、遺構の密集度が東西の部分と比べて群を抜いていることから、遺跡群及び、鉄生産の中心は中央部分であると結論付けるに至った。また、軽井川の地で巨大な製鉄コンビナートが営まれるに至った背景を探る方法として、巨大製鉄コンビナートの成立に欠かせない以下の三つの条件（①低い丘陵、②鉄の原料（砂鉄もしくは鉄鉱石）、木材の調達容易さ、③流通にすぐれた地形）を挙げ、項目ごとに分析した結果、低丘陵に位置し、付近に存在する鯖石川の流域から砂鉄、炉や窯を構築する耐火性の高い粘土を入手することが可能であった軽井川は、鉄生産に必要な条件を全て満たす理想的な場所であったことがわかった。流通の面でも、近隣に三嶋^{みしまのうまや}駅^{の存在}の存在をうかがわせる遺跡があり、古代の官道が通っていたと推定されていることに加え、鯖石川を利用した水運が行われた可能性もあることから、十分に条件を満たしていたものと思われる。さらに、古代の官衙を思わせる遺跡が軽井川の付近から

発見されていることから、鉄生産の背後に律令体制下における国家の関与があった可能性が非常に高い。しかし、それだけでは説明できない部分もある。それは、軽井川における鉄生産が、律令体制が傾いていく9世紀後半～10世紀に最盛期を迎えるということである。このことについて私は、在地の富豪層宅と思われる遺構が検出された小峯遺跡が近くに存在することを根拠に、律令体制の崩壊以後は在地の有力者が生産の管理に携わっていたと考えたが、柏崎の古代史をいくら紐解いても、生産体制、管理組織、有力人物など当時の事実を今に伝える歴史的資料が残されていない為、生産を管理した有力者は一体誰なのかという答えに辿り着くことが出来ず、その部分が心残りである。

この論文を書くに当たり、正式な報告書が出ていない遺跡群を卒業研究の対象とすることに様々なご批判を頂いたが、私の研究が軽井川における鉄生産を含めた柏崎の古代史という壮大な暗闇を照らす光の一筋にでもなれば幸いである。

古墳時代の刺突漁具副葬の時期的変遷の検討

吉田有里

弥生時代後期～古墳時代後期の墳墓・古墳には他の副葬品と比べると出土例は少ないが銚・ヤスといった鉄製刺突漁具が副葬される。副葬刺突漁具は副葬される古墳、時期、地域にかなり差が見られる。本研究では、刺突漁具副葬の時間的な様相の変遷について把握を試みた。

分析は当該期における南東北から沖縄県を除いた地域に分布する 54 古墳から出土した刺突具を型式分類し、古墳の分布する地域、規模、墳形、他の副葬品との関連を検討した。型式分類は、茎部があるものをⅠ類、茎部のかわりに柄袋を持つものをⅡ類と大別し、刺突部が 1 本からなる単式のもの(A)と複数本からなる複式のもの(B)に区分する。その下位項目として、逆刺があるもの(1)、逆刺のないもの(2)、刺突部が刀子状のもの(3)に区分し、(1)・(2)については、さらに大小に分類し、分類の結果、当該期に出土する刺突具はⅠA1 大型・ⅠA1 小型・ⅠA2 大型・ⅠA2 小型・ⅠB1 大型・ⅠB1 小型・ⅠB2 小型・ⅠB3 型・ⅡA1 大型・ⅡA1 小型・ⅡA2 大型・ⅡA2 小型・ⅡB1 大型・ⅡB2 大型・ⅡB2 小型の 15 型式が確認できた。

結果、弥生時代後期から古墳時代前期は畿内の 100m 以上 170m 程度の古墳からⅠB1 大型が出土する一方、ⅠB1 小型は畿内以外の地域における広域地域の盟主とみられる首長墳墓からの出土が確認されている。また、ⅠB3 型は、近畿・中国地方から出土し、畿内以外の地域に分布する小規模な古墳においても、畿内政権からの下賜品と思われる銅鏡と伴出している。中期には前期以前まで刺突具副葬がみられなかった地域からも出土する。また、畿内以外の地域に分布する古墳からⅠB1 大型の出土が認められるようになり、特に瀬戸内海沿いの地域に比較的出土が認められる。前期に比べ出土型式にバラエティが増し、頸部に振りが入る装飾性の強いものも出現する。後期になると前・中期とは一変し、北九州の海岸沿いに集中する他、瀬戸内海沿岸や北陸の海岸沿いに分布が見られ、墳形が判明している 12 古墳中 11 古墳が円墳である。出土型式は九州地方にⅡA1 大型・小型、ⅡA2 大型・小型が集中し、他地域ではⅠA1 小型・ⅡA2 小型がわずかに見られる。

以上のことから、刺突具副葬は畿外で始まり、それが畿内政権に管理・干渉されるようになったのではないかと考えた。ほぼ同時期に造営されたと思われる大阪紫金山古墳と三重石山古墳における刺突具の内容の差異にもみられるが、畿内政権の権威を誇示するために、畿内に限定的に大型品を下賜したのでないだろうか。このような規制は中期には緩和・もしくは形骸化したように思われる。中期後半以降は古墳の立地や、刺突具の形態に後世の民俗資料との類似点から、当該期における刺突具は各地域における集団の生業に使用した道具であるといえる。今回は触れることはできなかったが、前・中期の副葬刺突具は海洋・河川に関わるなんらかの行為を象徴すると広く主張されている(山中英彦 1980～1995、真鍋篤之 1999・2000、静野孝之 1999・2000、門田誠一 2001、魚津知克 2007)。前・中期の象

徴的な刺突具から後期の実用的な刺突具への変遷は、後期に急激に変化したものではなく、中期後半から変化が始まっていたと考えられる。

本稿作成にあたり、日頃より暖かいご指導を賜りました黒崎・高橋両先生に心から感謝致します。また、大学院生の先輩方をはじめ、ご指導・ご協力を賜った皆様に深く御礼申し上げます。

平成19年度 富山大学考古学研究室 修士論文・卒業論文発表会

日時：平成19年3月8日13:00～

場所：富山大学人文学部6番教室

当日のスケジュールは以下の通りです。お問い合わせなどありましたら076-445-6195(富山大学考古学研究室)までご連絡ください。参加を希望される方は tomidaikouko@yahoo.co.jp までご連絡ください。聴講は無料ですので皆様ふるってご参加ください。

【修士論文】

小林高太「中世集団墓の被葬者像についての研究」

【卒業論文】

赤座裕子「古墳時代の石川県における副葬品玉類の研究」

小川絵理香「古墳転換期前夜の北陸における地域間交流に関する一考察 ― 供献土器を中心として―」

北村志織「遺跡分布から見る富山県―歴史時代以前の地域性に関する一考察―」

小松彩乃「埋甕についての一考察 ―長野県の事例を中心として―」

下嶋明日香「中世荘園における集落群の様相 ―越中徳大寺領宮河荘推定地 熊野遺跡群において―」

竹中庸介「北陸における古墳研究の一考察 ―福井県と石川県を事例にして―」

栃堀哲彦「北陸における刀剣形石製品の研究 ―分類からの考察―」

松岡治奈「加賀国府移転問題についての考古学的研究―立国当初における国府の加賀郡所在の可能性について―」

皆川恒子「富山県におけるカマド出現・普及の背景」

山崎翔「古代製鉄コンビナート、軽井川南遺跡群についての一考察」

吉田有里「古墳時代の刺突漁具副葬の時期的変遷の検討」

追い出しコンパのお知らせ

富山大学考古学研究室では、3月8日の修士論文・卒業論文発表会の後に追い出しコンパを行います。ご多忙中とは思いますが、参加していただければ幸いです。

日時：3月8日19:00～

場所：一次会・・・北の門（7000円）

二次会・・・ばさら（3000円）

※参加を希望される方は3月1日までにtomidaikouko@yahoo.co.jpまでご連絡ください。

※費用は出席者の人数によって多少前後することがありますので、ご了承ください。

一次会：北の門の地図



二次会：ばさらの地図



編集後記

まだまだ寒さの残る日々が続いていますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。今年の冬は去年の冬とは違い、寒さが続き雪の降る日が多いですね。体調管理には十分に気をつけたいものです。

この寒さと雪の日を乗り越えると、もうすぐ春の季節がやってきます。春といえば、卒業式や入学式を思い浮かべる人が多いと思います。卒業生の皆さんには一年間だけでしたが、大変お世話になりました。ありがとうございました。

卒業生の皆さんが抜けた後、新二年生とともに考古学を頑張っていきたいものです。

(今津和也)

富大考古通信 第四号

配信日 2008年3月11日

編集・配信 富山大学人文学部考古学研究室

住所 930-8555 富山市五福3190

TEL 076-445-6195

留守番アクセス 4000 BOX番号 6195

HP <http://www.geocities.jp/tomidaikouko/>

メール tomidaikouko@yahoo.co.jp

※メールつきまはしては、迷惑メールと区別するためタイトルに必ず「富山大学考古学研究室」と入力して下さい。ご協力よろしくお願ひいたします。